花園大学社会福祉学部研究紀要　第22号　2014年３月

ロールシャッハ・テスト技法の使用実態と臨床感について

丹　治　光　浩　松　本　真理子

本研究の目的は、わが国の臨床場面において使用されているロールシャッハ技法の実態とそれに対する臨床家の意識について調査し、ロールシャッハ・テスト教育の今後の方向性を探ることである。

ロールシャッハ・テスト関連の２つの学会名簿から無作為抽出した588名を対象にアンケート調査を実施した結果、最初は片口法で学んだ者が最も多いものの（60%）、現在は包括システムで実施している者が最も多かった（59%）。また、使用技法を変更した者が51%にみられ、そのほとんどが片口法から包括システムへの変更であった。その理由としては、エビデンスの存在、分析・解釈の容易さなどが挙げられた。一方、解釈には形式分析のみでなく、内容分析や継列分析を盛り込むとした回答が多く、わが国の臨床家が統合的な解釈を実践していることが示唆された。

ロールシャッハ・テストに対する課題としては、「スコアリングの難しさ」「研修の機会」「職場の理解」「技法の違いをめぐる対立」「大学院教育の充実」などが挙げられ、今後のロールシャッハ・テスト教育のあり方を検討する必要性が考えられる。

キーワード：ロールシャッハ・テスト、使用実態、臨床感

The current state of using Rorschach test techniques in clinical situations in Japan and clinicians' awareness of the technique were investigated. Furthermore, the future directions in Rorschach test education were discussed. A questionnaire survey was conducted with participants randomly selected from a lists of two societies related to Rorschach tests（N = 588）. The results indicated that though most participants had at first learned the Rorschach test techniques through the Kataguchi method（60%）, most of them were using it with the comprehensive system at the time of the survey（59%）. Of the participants, 51% had changed the technique they were using, and the majority had changed from Kataguchi method to the comprehensive system. The reasons for the change were empirical evidence, easiness of analysis and interpretation, among others. On the other hand, many of the participants responded that they used not only formal analysis, but also content analysis and sequential analysis in their interpretations, suggesting that Japanese clinicians were making comprehensive interpretations. Problems in the Rorschach test that were identified included, difficulties in scoring, opportunities for training, understanding at the workplaces, discussions regarding differences in techniques, and the promotion of postgraduate education, among others. It was concluded that discussions regarding the future directions of Rorschach test education were necessary.

Key words : Rorschach test, test techniques, awareness of clinicians

1. 問題と目的

ロールシャッハ・テストは、被験者にインクのしみを見せて何に見えるかを問うというユニークな手法や考案者のHermann Rorschachが37歳という若さでこの世を去ったことなどを背景として、世界中で使用される代表的な心理検査として発展した。たとえば、アメリカでは、Bruno Klopfer（クロッパー法）・Samuel Beck（ベック

法）・Marguerite Hertz（ヘルツ法）・Zygmunt Piotrowski（ピオトロフスキー法）・David Rapaport（ラパポート法）という5名の心理学者によってそれぞれ独自の技法が提唱され、日本でも片口安史がクロッパー法を基に体系化した片口法を初めとして、阪大法・名大法などの技法が生み出された。その後、こうした技法の裏づけに疑問を持ったJohn E. Exnerは、膨大なデータを統計的に分析することによって、包括システム（エクスナー法）を確立させ、多くの国で支持を得るようになった。しかしながら、実際には未だ多くの技法が混在して使用されていると同時に、ロールシャッハ・テストのエビデンスを疑問視する声は根強く、R－PASといった新たなシステムも開発されている現状がある。こうした現状は、クライエントの便益性、後継者養成の観点から見て憂慮すべき事柄の一つである。

そこで、我が国の臨床場面において使用されているロールシャッハ技法の実態とそれに対する臨床家の臨床感について調査し、ロールシャッハ･テスト教育の今後の方向性を検討することを目的として本研究を行った。

2. 方法

調査対象は、日本ロールシャッハ学会，および包括システムによる日本ロールシャッハ学会の名簿から300名ずつ600名を無作為抽出したあと、両方の学会に入会している会員12名を除いた588名とした。調査は、2012年2月～3月にかけて無記名の郵送法で行った。

調査内容は、最初に学んだロールシャッハ･テスト技法、現在使用しているロールシャッハ・テスト技法、使用技法変更経験の有無とその理由、解釈に用いる分析内容、使用頻度の高いその他の投映法検査などの計12項目であった（別紙資料）。

3. 結果

405名から回答が得られたが（回収率68.9%）、そのうち回答に不備があった4名を除外し、最終的には401名の結果を分析対象とした。回答者の内訳は、男性149名（37%）、女性252名（63%）で､平均年齢は43.1（SD=10.1）歳であった。回答者の臨床歴は、平均17.0（SD=10.1）年であった。

回答者の所属領域は、図1のように医療が最も多く209名（49%）、次いで司法・矯正が77名（18%）、教育（教員）が61名（14%）、福祉が41名（10%）、教育（スクールカウンセラー:SC）が33名（8%）、開業が7名（2%）であった。

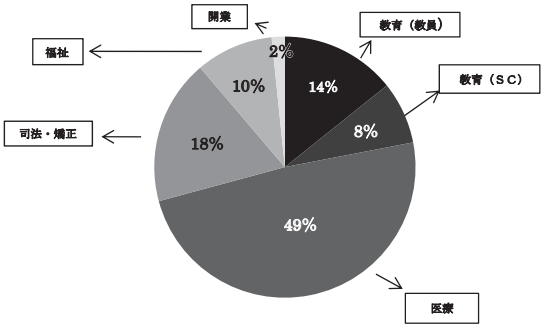

図1．回答者の所属領域

回答者の臨床歴は図2に示した通り、初心者からベテランまで全体にバラついているものの、11年～15年が最も多く、平均値は約15年であった。

ロールシャッハ･テストの年間実施件数は、図3のように1～10件が最も多く（64%）、次に11～20件（14%）､21～30件（8%）の順であった。この結果を月平均に換算するとロールシャッハ・テストの年間実施件数は10数件となり、1か月に換算すると1件程度となる。

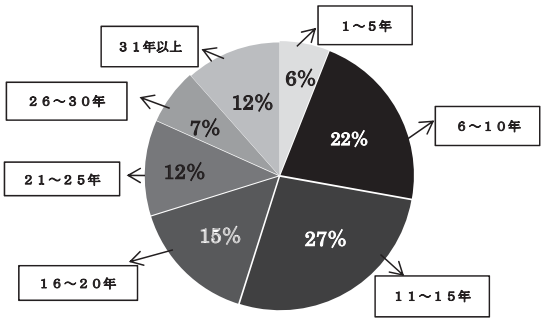

図2．回答者の臨床歴

図4は、最初に学んだロールシャッハ・テスト技法と現在使用しているロールシャッハ・テスト技法についてまとめたものである。最初は片口法

で学んだ者が最も多いものの（60%）、現在は他技法からの変更も含め包括システムで実施している者が最も多かった（59%）。その他、阪大法、名大法については、ほとんど変化がなかった。

なお、技法の変更は回答者全体の51%にみられ、中でも片口法から包括システムへの変更が最も多く、変更者全体の65%を占めていた。

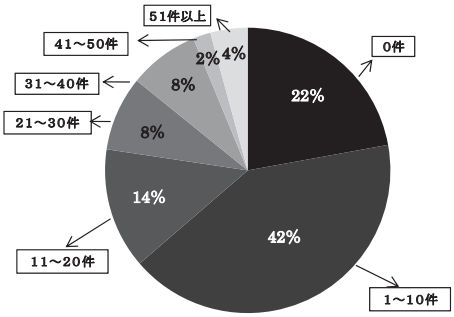

図３．年間実施件数

技法の変更理由（自由記述）をKJ法によってまとめたところ、最も多かったのは、「勤務先で使用されていたから」(21%）と「客観性に優れ、エビデンスがあるから」（21%）であった（表1)。同様に、技法を変更したメリットをまとめたところ、「スコアリングや解釈が容易になった」(30%）が最も多く（表2)、変更のデメリットとしては、「解釈が表面的、画一的になった」(22%）が最も多かった（表3)。

技法を変更していない202名に変更希望を尋ねたところ、34名（17%）が変更を希望していた。変更希望の理由と変更できなかった理由については表4に示した通りである。

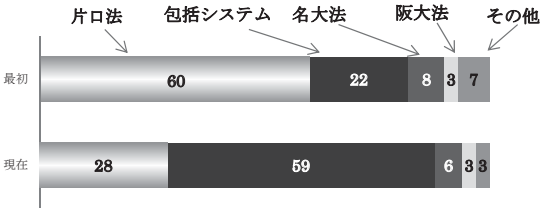

図４．使用技法　　（単位は%）

結果報告（所見）に盛り込む内容（複数回答）としては、1151人中、形式分析が355人（31%、回答者の89%)、内容分析が331人（29%、回答者の83%)、系列分析が287人（25%、回答者の72%)、限界吟味が117人（10%、回答者の29%)、その他が61人（1%、回答者の15%）であった（図5)。

ロールシャッハ・テスト以外の投映法検査でよく使っているもの（複数回答）としては、1069人中、SCTが289人（27%)、バウムテストが282人(26%)、HTPが158人（15%)、P-Fスタディが125人（12%)、風景構成法が110人（10%)、人物画が71人（7%)、その他が34人（3%）であった(図6)。

表１．使用技法を変更した理由　　（　　）内は%

理　　由	人数
勤務先で使用されていたから	55人（ 21）
客観性に優れ、エビデンスがあるから	55人（ 21）
研修・講義を受けて	35人（ 13）
分かりやすい・学びやすいから	40人（ 15）
世界の主流だから	33人（ 13）
役立つから（フィードバック･情報量など）	22人（ 8）
臨床能力が向上するから	8人（ 3）
その他（改訂についていけない､自分にあってる）	10人（ 4）
計	260人（100）

表２　技法変更のメリット　　（　　）内は%

メリット	人数
スコアリングや解釈が容易になった	80人（ 30）
客観性・エビデンスに優れている	60人（ 22）
見方が広がった・解釈が深まった	39人（ 14）
フィードバックしやすい	25人（ 9）
他職種と情報交換しやすい	20人（ 7）
研究・文献が多い	18人（ 7）
仲間や研修の機会が増えた	13人（ 5）
その他（クライエントの負担の軽減､時間計測が不要）	15人（ 6）
計	270人（100）

表３　技法変更のデメリット　　（　　）内は%

デメリット	人数
表面的・画一的な解釈になった	27人（ 22）
習得に時間がかかる	20人（ 16）
スコアリングが難しい	18人（ 14）
少数派なので共通認識を持ちにくい	10人（ 8）
前の技法と混乱する	9人（ 7）
基礎データが少ない	7人（ 6）
学べる場が少ない	4人（ 3）
その他（精神力動面が弱い､数値に頼りすぎる､再施行が負担）	30人（ 24）
計	125人（100）

表４　技法の変更希望理由、変更しなかった理由　（　　）内は％

変更したい理由	人数
包括システムが主流だから	12 人（ 41）
現在の技法では不十分だから	8 人（ 28）
視野を広げたいから	6 人（ 21）
職場の技法が異なっているから	3 人（ 10）
計	29 人（100）
変更したいが、しなかった理由	人数
現在の技法でやれているから	23 人（ 68）
多忙だから・習得に時間がかかるから	7 人（ 21）
学ぶ機会がなかったから	2 人（ 6）
用いる機会がないから	2 人（ 6）
計	34 人（100）

表５　技法の変更を希望しない理由　（　　）内は％

変更したくない理由	人数
今の技法が素晴らしいから	58 人（ 30）
必要性を感じないから	46 人（ 24）
今の技法が主流だから	26 人（ 14）
他の技法も併用しているから	20 人（ 10）
今の技法をさらに深めたい	18 人（ 9）
今の技法を使い慣れているから	9 人（ 5）
他の技法を学ぶ機会がないから	8 人（ 4）
他の技法を学ぶと混乱するから	4 人（ 2）
自分に合っているから	3 人（ 2）
計	192 人（100）

最後にロールシャッハ・テストに対する臨床感を尋ねたところ、表６のようにさまざまな回答が寄せられた。その多くはロールシャッハ・テストの有用性について述べたものであったが、「スコアリングの難しさ」「研修の機会」「職場の理解」「技法の違いをめぐる対立」「大学院教育の充実」などの課題も挙げられた。

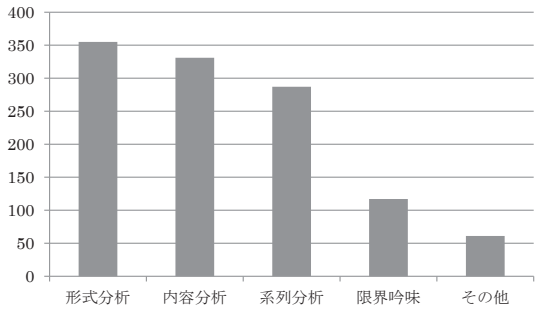

図５．結果に盛り込むもの

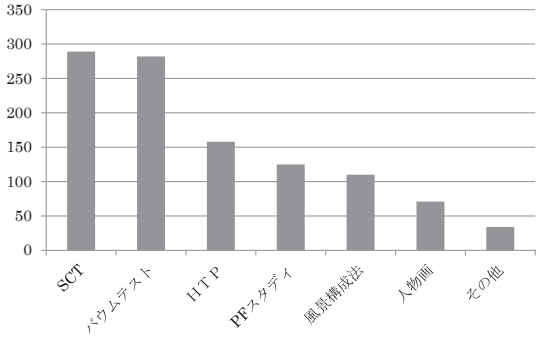

図６．その他の使用投映法

表６　ロールシャッハ・テストに対する臨床感＜複数回答あり＞　（　　）内は％

臨床感	人数
ロールシャッハ・テストは有用で素晴らしい	77 人（ 23）
今後も研鑽を積みたい	68 人（ 20）
さらなる研究が必要	50 人（ 15）
研修の機会がほしい	25 人（ 7）
実施や解釈に時間がかかる	25 人（ 7）
初学者がもっと勉強すべき	22 人（ 6）
職場（医師）の理解がほしい	19 人（ 6）
検査の限界を考えるべき（過信しない）	14 人（ 4）
臨床能力による違いが大きい	12 人（ 4）
スコアリングが難しい	11 人（ 3）
技法の違いを巡る対立をなくすべき	7 人（ 2）
大学院教育の充実が必要	6 人（ 2）
その他（保険点数が低い、将来性が乏しい）	5 人（ 1）
計	341 人（100）

4. 考察

小川（2011）の調査で片口法の使用率が 60.3%、包括システムの使用率が 14.9%だったことと比較して、今回は両者の関係が逆転していた。これは、調査対象の約半数が包括システムによる日本ロールシャッハ学会の会員であることが影響していると思われる。

ただ、技法の変更者が全体の 51％に認められ、変更の理由やメリットとして「エビデンスの存在」「分析・解釈の容易さ」などが挙げられた点については、近年のエビデンス・ベイスドや効率化といった社会的潮流の影響が示唆される。

一方、技法変更のデメリットとして「解釈が表面的である」という回答が多く認められたが、解釈に

は形式分析（89%）のみでなく、内容分析（83%）、系列分析（72%）を盛り込むとした回答も多く、我が国におけるロールシャッハ・テストの伝統として形式分析のみでなく、内容分析や系列分析を重視する傾向が示唆された。この点は、今後のロールシャッハ法教育における重要な視点となるかもしれない。また、「習得に時間がかかる」、「スコアリングが難しい」といった回答からは、継続研修の必要性を指摘することができる。

ロールシャッハ・テスト以外の投映法の使用頻度について小川（2011）の調査では、バウムテスト、SCT、HTP、風景構成法、P－Fスタディの順になっているが、今回の調査では、SCT、バウムテスト、HTP、P－Fスタディ、風景構成法となっていた。これは、調査対象の違いが影響していると推測される。

ロールシャッハ･テストに対する自由記述で挙げられた「スコアリングの難しさ」「研修の機会」「職場の理解」「技法の違いをめぐる対立」「大学院教育の充実」などは、今後のロールシャッハ･テスト教育について技法を超えた教育の必要性を示唆しているものとして考えられる。

文献

小川俊樹（2011）：心理臨床に必要な心理検査教育に関する調査研究　第１回日本臨床心理士養成大学院協議会研究助成研究成果報告書

斎藤高雄・元永拓郎（編著）（2012）：新訂臨床心理学特論　放送大学教育振興会

－資料－

ロールシャッハ・テストの技法に関する調査

ご協力のお願い

ロールシャッハ・テストは世界的に広く用いられている心理検査の一つで，その実施法・解釈法についてはこれまでさまざまな技法が提唱されています。日本においても複数の技法が用いられており、2011 年 7 月に東京で開かれた国際ロールシャッハ及び投映法学会においても新たなシステムが提唱されるなど，今後もこうした状況が続くものと思われます。本研究は，我が国におけるロールシャッハ・テスト教育の今後の方向性を検討することを目的として、臨床場面において使用されているロールシャッハ技法の実態について調査するものです。

つきましては，お忙しいところ誠に恐縮ですが，下記のアンケートにご協力下さいますようお願い申し上げます。質問紙は匿名性が保たれるよう無記名で実施しています（番号などはつけておりません)。回答時間は 10 分程度です。いただいた情報は厳重に管理し，統計的に処理した上で本研究のためだけに使用させていただきます。

調査の趣旨をご理解いただき，ご協力いただける方は，質問紙にご記入の上，返信用封筒にて郵送願います。期日は特に設けておりませんが，できれば本調査用紙がお手元に届いてから 10 日以内を目途にご返送いただけると幸いです。

本調査は日本ロールシャッハおよび投映法学会，および包括システムによる日本ロールシャッハ学会の会員名簿から無作為抽出させていただいた会員の方に郵送させていただくものですが，個人研究の範疇で行われるものです。本調査についてご不明な点がありましたら，下記の問い合わせ先までご連絡いただきますようお願い申し上げます。

研究者
花園大学　　丹治光浩
名古屋大学　松本真理子
返送先・問い合わせ先
〒604-8456　京都市中京区西ノ京壺の内町８－１
花園大学　丹治研究室：m-tanji@hanazono.ac.jp

質問１．あなたはこの１年間に業務としてロールシャッハ・テストを何件くらい実施しましたか。

（1）０件　（2）１～10 件　（3）11～20 件　（4）21～30 件
（5）31～40 件　（6）41～50 件　（7）51 件以上

質問２．あなたは最初にロールシャッハ・テストを学んでから今年で何年目になりますか。

（1）１～５年　（2）６～10年　（3）11～15年　（4）16～20年
（5）21～25年　（6）26～30年　（7）31年以上

質問３．あなたが最初に学んだロールシャッハ・テスト技法は何でしたか。（重複回答可）

（1）片口法　（2）阪大法　（3）包括システム　（4）名大法
（5）その他（　　）

質問４．現在あなたが主に使っているロールシャッハ・テスト技法は何ですか。（重複回答可）

（1）片口法　（2）阪大法　（3）包括システム　（4）名大法
（5）その他（　　）

★最初に学んだ技法と現在主に使っている技法が異なっている場合は質問５へ。

質問５．使用する技法を変更した理由は何か。

（　　）

質問６．使用する技法を変更して良かった点（新しく学んだ技法の長所など）は何ですか。

（　　）

質問７．使用する技法を変更して良くなかった点（新しく学んだ技法の短所など）は何ですか。

★最初に学んだ技法と現在主に使っている技法が同じである場合は質問８へ。

質問８．あなたはこれまで「使用する技法を他の技法に変更したい」と思ったことはありますか。

（1）はい　（2）いいえ

「（1）はい」「（2）いいえ」それぞれの理由をお書き下さい。

（　　）

質問９．ロールシャッハ・テストの結果報告（所見）に盛り込む内容をお選び下さい。（複数回答可）

（１）形式分析の内容　（２）内容分析の内容　（３）系列分析の内容
（４）限界吟味（好悪図版・イメージ図版の選択を含む）
（５）その他（　　）

質問 10．ロールシャッハ・テスト以外の投映法検査でよく使われるものをお選び下さい。（複数回答可）

（１）バウムテスト　（２）HTP　（３）SCT　（４）人物画　（５）風景構成法
（６）P-F スタディ　（７）その他（　　）

質問 11．ロールシャッハ・テスト技法について日頃思っておられることがありましたら，自由にお書き下さい。

最後にあなたの性別，年齢，所属などについてお答え下さい。

性別（　男　・　女　）
年齢（　　）歳
臨床経験年数（　　）年
主な所属
（１）教育機関（大学、小・中・高校など）
（２）病院・クリニックなど医療機関
（３）家裁など司法機関
（４）児相・発達センターなど福祉関連機関
（５）その他（　　）

★質問は，以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。